

2017年5月24日

資料室だより 103

+Bach, J.S.; Christum wirsollenlobenschon; Kantate, No 121

バッハの教会カンタータのピアノヴォーカルスコアで欠けているものを少しずつ補充しています。今回、121番を補充しました。クリスマス用のコラール・カンタータとして知られるものです。コラールはバッハのオルゲルビュヒラインにも作曲されていますのでご存知の方も多いと思います。

このカンタータのコラール原旋律はEG(Evangelisches Gesangbuch), No 539にあります。楽譜の下に小さく1524年ルターの作であると書かれていますが、nachdem Hymnus "A solis ortu cardine" des Caesarii Sedulii um 430と記されていることに注目してください。

ルターは、430年、つまり5世紀の詩人セドゥリウスのラテン・イムヌス A solis ortu cardine に基づいてコラールを作ったということがわかります。初期ラテン詩人であるセドゥリウスはアルファベットのA~Zまでの頭文字を行の冒頭に持ってくる言葉遊びをしながらキリストの降誕から復活までを描いた長大な「過ぎ越しの歌」という詩を残しています。このなかの降誕の部分だけがローマ典礼の聖務日課に残り、また聖母賛歌はマリアのミサの入祭唱として有名な Salve sancta parens として残ります。そしてこの旋律はカロリング朝より前、つまりグレゴリオ聖歌といわれるレパートリーの総体ができる前のスペインで成立した旋律を用いています。いわゆる教会旋律として様々なテキストとともに親しまれていますが、commixtus といって旋法が混在しています。レから順次進行で始まり第一旋法の雰囲気を持ちますが、ミで終わる第三旋法なのです。この不思議な神秘的な旋律の形状を修正することなくルターはコラールに再生させます。そしてバッハのオルゲルビュヒライン (BWV611) にも昇華されていきますがバッハもまたこの旋法混在の不思議さを残したまま、後期バロック様式のなかにむりやり修正してねじこむということをしていません。伝統の様式を活かしながらそこに新しいものを入れて豊かにしていきます。それはこの教会カンタータでも同じことです。5世紀から教会に流れ続ける旋律を、18世紀のバッハが見事にプロテスタント教会のなかで Christum wirsollen として活かしています。

このカンタータの初演は1724年12月26日です。降誕の2日目に指定されているからです。しかしこの日はステファノの殉教記念日でもあり、聖書の朗読箇所には呼応しないことが指摘されてはいますが、降誕の8日間 infra octava のなかの2日目として、降誕の喜びを深める時期の音楽であることは確かです。

カンタータやオルガン曲と共に、ルターの荘厳なコラール、そしてその源泉であるラテン聖歌 A solis ortu もあわせて味わい、キリスト教音楽の伝統の豊かさに思いを馳せてみてください。

杉本ゆり記